様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	臨床心理士養成コース ／小倉　正義

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1．目標・計画

今年度の科学研究費申請のために，中学生・高校生（以下，中高生）を対象にネットいじめに関する調査を行い，その調査結果をもとにネットいじめへの予防的介入や発生時の対応のガイドラインを作成することを目的とした研究計画を提出した。来年度の科学研究費申請のために，今年度中にこのネットいじめの実態調査やメンタルヘルスとの関連についての調査の実施と分析をすすめ，その経過をもとに申請の内容を練りたいと考えている。また分担研究者として，「発達障害や学習困難をもつ小中学生の認知的個性を活かす特別支援の方策に関する研究」（2011-13年科学研究費補助金基盤研究（C），研究代表者：松村暢隆先生）に関わっているので，この研究については引き続き行い，成果を挙げていきたい。さらに他の分担研究に関しても申請を考えておく。

2．点検・評価

中学生を対象としたネットいじめに関する調査研究については，7月にIACAPAP（国際児童青年精神医学会）で発表するなど，分析と成果のまとめをすすめてきた。これらの蓄積をふまえて，予定通り主任研究者として「ネットいじめの予防に関する包括的研究」（若手B）を申請した。また，分担研究者として新規に「災害体験後の心理的反応に関する心理教育プログラムの開発：「こころの防災」にむけて」（基盤C・研究代表者：内海千種）を申請した。さらに，連携研究者として「青少年におけるインターネット依存への臨床心理学的介入」（挑戦的萌芽・研究代表者：本城秀次）も申請した。
平成23-25年度の継続の分担研究者として「発達障害や学習困難をもつ小中学生の認知的個性を活かす特別支援の方策に関する研究」についても最終年度に向けて研究をすすめてきた。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

1．目標・計画

昨年度1月に大学訪問を行い，説明会を実施した。希望する学生がいる場所で説明会を実施することは，学生にとっても受験選択のための判断材料になり，指導する教員についても進路先として推薦していただける可能性が高まるに感じられたので，今後も可能な範囲で実施していきたい。また，大学の実績や研究成果等を積極的に広報していくことが今まで以上に重要になってくると考えている。そのために，県内外での社会貢献や研修にさらに力を入れたい。

2．点検・評価

今年度は7月に大学訪問を行い，大学院入試説明会を実施した。1年生から4年生までの学生が説明会を聞きに来てくれており，参加していただいた学生の方はたくさんの質問をしてくれ，受験したいと話してくれていた学生もいた。この説明会はある一定の成果を得ることができたと考えられる。また年間を通して大学の実績や研究成果等を積極的に広報していく意味でも，徳島県内だけでなく徳島県外でも社会貢献や研修を積極的に行った。私個人も含めコース全体の努力の結果，臨床心理士養成コースは定員充足を達成した。今後もさらなる努力をしていきたい。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①学部教育では，大人数の講義であっても学生が主体的に授業に参加できるよう，体験的なワークを多く取り入れるなど方法を工夫する。演習の授業では，学生の特性もとらえながら内容・方法を考え，より実践力をつけることができるようにしたい。また，卒論（3年生・4年生）の指導では，卒論作成に向けて主体的に自らのテーマに取り組むことができるように指導したい。
②大学院では，講義・演習やケースのスーパービジョン，勉強会等を通して，臨床心理士の基礎的な力を養成し，臨床心理士の資格試験に必要な知識を伝える。また研究指導では，研究者的な視点の養成を行う。
③特にゼミ生（3年生，4年生，M1，M2）を中心に，論文指導の中で研究指導はもちろんのこと，文章の論理展開の組み方や言葉の使い方についてもしっかり指導する。
④講義や演習，ゼミ等のなかで，学生の進路指導や職業意識を育てることもできるように工夫する。
⑤その他，教員としてサポートするべきことをサポートする。

2．点検・評価

①大講義（カウンセリング論・生徒指導論）では，体験的なワークをできる限り多くとりいれ，自分で考えることのできる時間を作ることができるように努めた。また演習では，それぞれの演習の目的に合わせ，発達障害の疑似体験プログラムやブロック制作などを行い，体験を通して考えることを重視した。卒論指導も3年生・4年生計9名に行った。4年生5名については，卒論を書きあげることを通して意識的に様々な語り合いをして，自己理解を深めることができるような時間をとった
②大学院は，「子ども理解と生徒指導」のなかで，教員・臨床心理士に求められる子どもを理解するために必要な観点を知識と体験の両方向から伝えることができるように工夫をした。また，その他の講義・演習・ゼミ・スーパーバイズ・勉強会では，理論と実践をつなぐことのできるように伝え方を工夫した。修論指導は，M1・M2の計16名に行い，M2の10名は無事修士論文を書き上げた。修論指導ではリサーチ・クエスチョンをもつことの意義，まとめることの意義，自らの論文の意義をなど様々なことを一緒に考えながら，理論と実践をつなぐことができる力をつけることができるように工夫した。
③予定通り，論理展開の組み方や言葉の使い方にも注意を向けて，研究指導を行った。特に卒論生・修論生には丁寧に添削をして，指導した。
④職業意識を育てることができるように，直接的にではないにしても，あるべき姿を学生が考えることができるように意識して講義や演習，ゼミを行ってきた。
⑤ゼミ生を中心に一人一人にどのようなニーズがあるかを注意して，できる限り適切なサポートするようにしてきた。コースの学生ともできる限り交流できる時間をもつように努力した。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

①発達障害の支援，学校と家庭の連携，中高生のメンタルヘルス，保護者支援の研究を中心に，実践性の高いものとなることを意識しながら積極的に研究をすすめていく。
②A論文を2本以上投稿する。
③国際学会・国内学会ともに必要な成果発表を行う。
④科研費だけではなく，その他の外部資金の獲得に力を入れる。

2．点検・評価

①「高等学校における発達障害のある生徒への支援に関する研究」（学長裁量経費（プロジェクト経費）），「中高生のメンタルヘルスに関する研究」（ネットいじめに関しては科研費申請中），「発達支援介入効果についての実証的検討モデルの開発」（厚生労働科学研究費（障害者対策総合研究事業）の分担研究の研究協力者），「ペアレント・メンターに関する研究」（助成金を申請中），「発達障害や学習困難をもつ小中学生の認知的個性を活かす特別支援の方策に関する研究」（科研費基盤研究（C）の分担研究者）などを中心に様々な研究に取り組んだ。
②A論文は共著者として1本掲載され，1本掲載予定，1本投稿中である。また，『子どもの強迫性障害診断・治療ガイドライン』（分担執筆・星和書店）が出版された。さらに，「子どもの心と学校臨床」に「ネットいじめを考える」（共著）というタイトルで論考が掲載された
③IACAPAP（国際児童青年精神医学会）にて，ネットいじめに関する研究成果を発表した。また，日本心理臨床学会では，障がいのある子どもの保護者の学校への関わりについての研究発表や発達障害に関連する自主シンポジウムの企画・司会を行い，日本教育心理学会では発達障害の研究についての自主シンポジウムで話題提供者として参加した。同じくIACAPAP，日本心理臨床学会，日本児童青年精神医学会，愛知児童青年精神医学会で共同研究者としていくつか発表を行った。
④上記の通り科研の申請を行った。また三菱財団に1件（結果待ち）共同研究者として，安心ネットづくり促進協議会に1件助成金・支援金の申請を行った。うち，安心ネットづくり促進協議会については，「発達障害のある青少年のインターネット利用に関する研究」というテーマで採択された。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

①大学の運営組織や運営目的をしっかりと意識し，教育実践に取り組む
②学校教育実践コース，臨床心理士養成コース内での責務を果たす。コース長，副コース長，担任をサポートする意識をもつ
③昨年度に引き続き，教員免許状更新講習実施委員会の委員としての責務を果たす

2．点検・評価

①予定通り，できる限り運営組織や運営目的を意識して行動した。
②学校教育実践コース，臨床心理士養成コース内での責務を，できる限り全うし，可能な範囲で他の先生のサポートも行った。
③予定通り，教員免許状更新講習実施委員会の委員としての責務を果たしてきた。

四国大学間連携による危機管理教育に関する検討のためのWGに参加した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

①昨年度に引き続き附属小学校におけるスクールカウンセラーとして，特に附属学校の教育相談や特別支援教育の部門での連携を図りたい（附属学校）。
②徳島県教育委員会や徳島市教育委員会など学校教育分野で各機関の連携し，様々なニーズのある子どもたちやその保護者への支援を行う（社会貢献）
③徳島県発達障害者支援センターなど県内外の各機関との連携を行い，発達障害の子どもたちとその保護者の方々への支援システムの構築に貢献する（社会貢献）
④その他，研究者や大学教員として，社会に貢献できることを常に考え実践する（社会貢献）

2．点検・評価

①附属小学校のスクールカウンセラーとして，予定通り任務を果たした。
②徳島県教育委員会・総合教育センター，徳島市教育委員会・教育研究所等と連携を取り，子どもたちや保護者への支援に関わってきた。
③徳島市発達障害者支援センターではペアレントメンター事業の実施を中心に支援の充実に向けて協同して取り組んだ。ペアレント・メンター事業関連では，4月に富山県で，6月に愛知県，１１月に東京と沖縄県，1月に愛知県，3月沖縄県で研修会講師を担当した。また，その他にもいくつかのNPO法人や親の会などの事業に協力し，発達障害児者とその家族への支援に積極的に関わってきた。
④徳島県臨床心理士会内で災害対策チームでの議論を深め，チームの構成員とともに臨床心理士として取り組む課題について検討している。また，ここで議論されたことを学部生・大学院生にもできる限り還元できるように，自分の中で整理していきたい。

また，日本コラージュ療法学会第4回大会運営委員会の事務局長，徳島県臨床心理士会の事務局長など学会・職能団体の運営にも積極的に関わった。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

大学開放事業や教育支援講師・アドバイザー事業などの大学の事業を積極的に活用して，地域に貢献してきた。
子どもパートナー認証講座の講師を担当した。
教員免許更新講習の講師を担当した。
心理・教育相談室の相談室スタッフとして責務を果たした。